

第 644 回

日本小児科学会東京都地方会講話会

プログラム

日 時 平成30年3月17日(土) 午後2時00分

場 所 東京女子医科大学弥生記念講堂



次回以降開催予定日

平成30年5月12日(土) 東京医科大学病院本館6階臨床講堂
平成30年6月9日(土) 東京医科大学病院本館6階臨床講堂
平成30年7月14日(土) 東京医科大学病院本館6階臨床講堂
平成30年9月8日(土) 東京医科大学病院本館6階臨床講堂
平成30年10月13日(土) 飯田橋レインボービル7階大会議室

世話人

プログラム係 高橋 和浩
帝京大学小児科 03(3964)1211
(FAX) 03(3579)8212

会場係 伊藤 康
東京女子医科大学小児科 03(3353)8111
(FAX) 03(5269)7619

事務局 03(5388)7007

e-mail: jpstokyo-office@umin.ac.jp

第 644 回 日本小児科学会東京都地方会講話会演題

(1 題 6 分、指定発言 5 分、追加討論 3 分以内、厳守のこと。○印演者)

第 1 グループ 14:00—14:30

座長 平林 真介 (聖路加国際病院小児科)

- 1) ウイルス感染を契機に発症したと考えられた Stevens-Johnson syndrome (SJS) の 1 例
○大城 沙彩、牧野 篤司、山本明日香、吉野 浩、楊 國昌 (杏林大学小児科)

6 歳男児。発熱、10% の皮膚病変、口唇のびらん、結膜の偽膜形成があり重症 SJS と診断した。入院当日から mPSL パルス療法 1 ケールを行い、SJS の発疹は退色傾向になった。しかし、パルス療法終了後ほぼ同時に、手掌足底に新たな手足口病様の発疹が出現し、IVIG 投与で改善した。

- 2) 頸部リンパ節腫脹を契機に診断された Sjögren 症候群の 1 例
○村井 裕香¹⁾、藤巻 有希²⁾、吉澤 和子²⁾、池原 聡²⁾、羽賀 洋一²⁾、本間 尚子²⁾、
三上 哲夫²⁾、松裏 裕行²⁾、小原 明²⁾
(東邦大学医療センター大森病院新生児科)¹⁾、(同 小児科)²⁾

14 歳女子。3 週間続く発熱、圧痛を伴う頸部リンパ節の腫脹を主訴に入院。白血球減少を伴い、亜急性壊死性リンパ節炎が疑われたが、IgG 高値であり膠原病疾患も念頭に精査をし、抗 SS-A 抗体陽性、ガム試験陽性、口唇腺組織へのリンパ球浸潤を認め最終的に Sjögren 症候群の診断に至った。興味深い症例であり、文献の考察も含め報告する。

- 3) 腸重積を契機に成熟 B 細胞性急性リンパ性白血病と診断された 1 女児例
○荒井 美輝、玉一 博之、松山 友紀、石橋 武士、富田 理、栗本 朋子、寺尾梨江子、
高田 オト、藤村 純也、清水 俊明 (順天堂大学 小児科)

5 歳女児。間歇的腹痛を主訴に近医を受診し、腸重積の診断で当院紹介となった。腸重積は用手整復されたが、入院時 CT で両側卵巣腫瘍と両側腎腫大を認め、卵巣の腫瘍生検および骨髄検査から成熟 B 細胞性急性リンパ性白血病の診断に至った。年長の腸重積例では悪性疾患の存在を念頭に入れて診察する必要がある、文献の考察も含め報告する。

第 2 グループ 14:30—15:15

座長 柿本 優 (東京大学小児科)

- 4) 脊髄動静脈奇形に伴う脊髄出血の 1 例
○大谷 勇紀¹⁾、鈴木 洋実²⁾、眞下 秀明³⁾、熊田 聡子³⁾、幡谷 浩史¹⁾
(東京都立小児総合医療センター総合診療科)¹⁾、(同 神経内科)²⁾、
(東京都立神経病院神経小児科)³⁾

脊髄動静脈奇形 (AVM) は脊髄動脈と静脈の異常な短絡により突発的な症状をきたす予後不良な疾患である。症例は 13 歳女子。突然の歩行困難を主訴に受診した。下肢の感覚優位の障害と弛緩性膀胱から脊髄円錐病変を疑い、脊髄 MRI で上記診断となった。突然の歩行困難では脊髄 AVM に伴う出血を鑑別に挙げ、適切な治療介入が必要である。

指定発言 高井 敬介 (東京都立神経病院脳神経外科)

5) 急性巣状細菌性腎炎を契機に脊髄くも膜嚢胞と診断した1例

○立川 聖哉¹⁾、平石 知佳²⁾、澤田 真子²⁾、斎藤 洋子³⁾、吉浦 由恵²⁾、宮井健太郎²⁾、
中谷 夏織²⁾、元吉八重子²⁾、清原 鋼二¹⁾ (東京北医療センター総合診療科)¹⁾、
(同 小児科)²⁾、(川口市立医療センターNICU)³⁾

以前より便秘症があった2歳5か月女児。急性腎盂腎炎のため加療したが改善乏しく、CTで急性巣状細菌性腎炎と脊髄くも膜嚢胞が判明した。便秘症に加え排尿時膀胱造影で残尿が多く、脊髄くも膜嚢胞による膀胱直腸障害が尿路感染の原因と考えられた。脊髄疾患に併発した複雑性尿路感染症の症例に関して文献的考察を加えて報告する。

指定発言 井原 哲 (東京都立小児総合医療センター脳神経外科)

6) 不適切な栄養管理により Wernicke 脳症をきたした1例

○初鹿 達朗、小穴 信吾、鈴木 俊輔、前田 朋子、渡邊 由祐、税所 純也、横山麻里亜、
栗山 絢子、加藤 幸子、縣 一志、河島 尚志 (東京医科大学小児科)

1歳5か月女児。けいれん発作、体重増加不良、不随意運動と精神運動発達遅滞を認めた。母親の食事への強い拘りにより極度の低栄養状態であった。ビタミンB1低値、頭部MRIにて両側基底核に異常信号を認め、Wernicke 脳症と診断した。乳幼児の Wernicke 脳症の報告は少なく、文献的考察を含め報告する。

指定発言 原 裕子 (川口市立医療センター放射線科)

総会及び名誉会員授与式 15:15—15:35

平成30年度 名誉会員 和田 紀之先生、麦島 秀雄先生

休 憩 15:35—15:45

感染症だより 15:45—16:05 (講演:15分+質疑応答:5分)

座長 岩田 敏 (国立がん研究センター中央病院感染症部)

神谷 元 (国立感染症研究所感染症疫学センター)

教育講演 16:05—17:05 (講演:50分+質疑応答:10分)

座長 伊藤 康 (東京女子医科大学小児科)

遺伝病の中枢神経障害の治療—最近の進歩—

衛藤 義勝 (一般財団法人脳神経疾患研究所先端医療研究センター センター長、
東京慈恵会医科大学 名誉教授)

従来治療が不可能であった遺伝病の中枢神経障害の治療が可能になった。特にライソゾーム病、ペルオキシゾーム病等の先天代謝異常症では、造血幹細胞治療、髄注による酵素補充療法、静脈注射による脳血液 (BBB) 通過型酵素製剤、或いは低分子治療薬、更にはアデノ随伴ウイルスベクターを用いての脳室内或いは脳実質内投与、レンチウイルスベクターを用いての遺伝子治療法がムコ多糖症、異染性白質変性症、副腎脳白質変性症等様々な遺伝病の中枢神経障害の治療に成功している。本講演ではこれらの最近の治療の進歩に関して解説する。

第3グループ 17:05—17:25

座長 佐藤 恭弘（博慈会記念総合病院小児科）

- 7) ロタウイルスワクチン2回接種後にロタウイルスとノロウイルスの混合感染により死亡した1例
○林 優佳¹⁾、白神 一博¹⁾、浦田 晋¹⁾、朝海 廣子¹⁾、進藤 考洋¹⁾、犬塚 亮¹⁾、
平田陽一郎¹⁾、高梨さやか²⁾、水口 雅²⁾、岡 明¹⁾

（東京大学小児科）¹⁾、（同 発達医科学）²⁾

Down症の1歳男児、ロタウイルスワクチン2回接種済。嘔吐下痢、意識レベルの低下を認めたため当院を受診した。多臓器不全をきたし、集学的治療を行うも第7病日に死亡した。便のRT-PCRにてノロウイルスと極少量のロタウイルスが検出された。重篤な経過を辿ったノロウイルスの混合感染症例で、ノロウイルスワクチンの早急な開発が望まれる。

- 8) 市販薬大量内服によるジフェンヒドラミン急性中毒の1例

○大北 恵子¹⁾、平井 康太¹⁾、高砂 聡志²⁾、坂間 隆¹⁾、朝長 優子¹⁾、高倉 広充¹⁾、
池上真理子¹⁾、岡本正二郎¹⁾、山口 公一¹⁾

（東海大学八王子病院小児科）¹⁾、（東京都立小児総合医療センター循環器科）²⁾

救急外来で意識障害、痙攣を診察する機会は多く、てんかん、脳炎・脳症、髄膜炎、頭部外傷、脳血管障害など原因は多岐にわたる。今回我々は比較的入手しやすい市販薬の大量内服により意識障害をきたしたジフェンヒドラミン中毒の13歳小児例を経験したので報告する。

第4グループ 17:25—17:50

座長 澁谷 義彬（帝京大学小児科）

- 9) 咽後膿瘍との鑑別に苦慮した川崎病不全型例

○大島 正成、小森 暁子、飯田亜希子、加藤 雅崇、中村 隆広、鮎沢 衛、高橋 昌里

（日本大学板橋病院小児科）

著明な頸部腫脹を呈する川崎病は、造影CTで咽後間隙に低吸収域を認め、化膿性頸部リンパ節炎を伴う咽後膿瘍として治療される例がある。2歳男児、発熱と頸部腫脹を主訴に来院。咽後膿瘍の診断で抗菌薬治療と穿刺排膿を行うも反応せず、心臓超音波検査で冠動脈輝度上昇を認め、川崎病不全型の診断に至った例を報告する。

- 10) 気道狭窄のためにPICU管理を要した川崎病の1例

○橋本 梨沙^{1),2)}、峠 千晶^{1),2)}、田中雄一郎¹⁾、益田 博司¹⁾、中尾 寛¹⁾、守本 倫子³⁾、
窪田 満¹⁾、石黒 精²⁾

（国立成育医療研究センター総合診療部）¹⁾、（同 教育研修部）²⁾、（同 耳鼻咽喉科）³⁾

6歳女児。発熱5日目に、頸部痛、開口障害、入眠時のいびきのため受診した。吸気時に軽度の喘鳴があり、頸部造影CTで咽後水腫を認めたため、PICUで気道管理を行った。呼吸症状に加えて川崎病主要4症状を示し、IVIG治療を行い、冠動脈病変は合併しなかった。当院PICUで管理した過去の川崎病症例と併せて考察する。

指定発言 西村 奈穂（国立成育医療研究センター集中治療科）

【運営委員会だより】

1. 第 644 回講話会（平成 30 年 3 月）のプログラム編成について報告がありました。
2. 抄録原稿の誤字・変換ミスなどの修正を運営委員会の判断で行うと通知することを確認しました。
3. 第 644～646 回講話会の教育講演および感染症だよりについて、講師と座長が確認されました。
4. 次期プログラム委員を、東京大学小児科の西村力先生にお願いすることになりました。
5. 3 月に開催される総会の議題案について確認されました。
6. 平成 30 年度のこどもの健康週間パンフレットに関して、執筆担当が確認されました。
7. 東京都地方会で作成する「緊急時を念頭にしたメーリングリスト」について、これまでに 601 名（全会員の 26%）の登録があったことが報告されました。
8. 第 643 回講話会（2 月）の出席者は 311 名、ベビーシッタールーム利用者は 2 名、前回講話会以降の新入会者 11 名、退会者は 11 名でした。
9. 平成 30 年 3 月 17 日（土）は第 644 回講話会で日本小児科学会東京都地方会総会および名誉会員証授与式が開催されます。

【演題の申し込みについてのお願い】

- ・ 動画が含まれる場合には、その旨を明示して下さい。
- ・ 原則として指定発言をつけて下さい。（共同演者から指定発言は頂けません）
- ・ 演題の締切は次のようになります。
- ・ 運営委員会にて抄録の修正をさせて頂く事もございますので、原則としてご了承下さい。

講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切
1 月	前年 11 月 30 日	2 月	前年 12 月 25 日	3 月	1 月 31 日
5 月	2 月 28 日	6 月	4 月 30 日	7 月	5 月 31 日
9 月	6 月 30 日	10 月	8 月 31 日	12 月	9 月 30 日

申込演題が規定数を上回った場合、さらに 1 回先になることがありますのでご了承下さい。
その場合、事務局よりご連絡します。

【演者の先生方へのお願い】

- ・ 一次抄録は 160 字以内に。また、二次抄録は日本小児科学会雑誌に掲載されますので規定の 200 字以内を厳守くださるようお願い致します。（原稿はワード入力にて e-mail にて事務局へお送り下さい。）
- ・ 出席した会員に発表の意味をより強く、明確に伝えるために、最後（または適切な時期）に Take Home Message（この発表から学ぶこと）を手短な一文で記したスライドを付け加えていただくようお願い致します。

【会員登録事項の変更届についてのお願い】

- ・ 自宅、勤務先の住所（プログラム送付先）等の変更または、改姓があった場合は、速やかに東京都地方会事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会される場合も必ずご連絡下さい。そのお届けがない場合は次年度も継続として年会費の請求を致します。
東京都地方会事務局 e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp / FAX : 03 (5388) 5193

【事務局よりご連絡】

- ・ 今回の教育講演には日本小児科学会専門医新制度における小児科領域講習の単位が付与されています。13 時から教育講演開始まで引換券を配布しますので、教育講演終了後から講話会終了までの間に引換券と単位認定証とを交換して下さい。
なお、引換券は当日限り有効です。
また教育講演開始後に入場、及び終了前に退出された方には小児科領域講習単位はお渡しできません。

Presentation について

発表は Computer Presentation (Windows のみ可、Mac は不可) のみで受け付けます。Mac の PC 持ち込みによる発表はご遠慮下さい。Powerpoint 2000 以上で作成、Font 文字は Powerpoint 備え付けのみ。CD-R もしくは USB メモリーにて、第 1、2 グループ発表者は午後 1 時 30 分までに、第 3 グループ以降の発表者は午後 3 時までにはスライド受付まで持参して下さい。機器操作は、当方で行います。あらかじめウイルス check をお願い致します。

動画について

動画の発表にはトラブルが多いため、下記の方針をご理解いただきますようお願い致します。

- ① 一般演題での動画の使用はできる限りお控えいただくようお願い致します。
- ② 動画の使用が不可避と考えられる場合、ファイルのセーブ法などの注意事項がありますので、学会事務局に必ず事前にご連絡下さい。
- ③ ②の場合にも、動画の映写にトラブルがあったときに備え、静止画像のみで構成された代替パワーポイントファイルをご用意下さい。当日、動画の映写が不可能と判断された場合には、代替パワーポイントファイルを用いて、時間通りに学会を進行させていただきますことをご了承下さい。

〈ベビーシッタールーム開設のお知らせ〉

乳幼児を同伴される方のために、ベビーシッタールームを開設します。利用ご希望の方は、利用日の 1 週間前までに問診票をダウンロードし、必要事項を記載の上、事務局へ e-mail または FAX でお申し込み下さい。問診票は東京都地方会ホームページにございます。利用当日、お子様が好きな食べもの・飲料・おもちゃ・着替え・おむつなどに名前を付けてご持参下さい。キャンセルされる場合は、3 日前までにご連絡をお願い致します。連絡のないキャンセルの場合は、次回以降の利用をご遠慮頂く場合がございます。なお費用は学会が負担致します。

日本小児科学会東京都地方会事務局 TEL 03-5388-7007/FAX 03-5388-5193
e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp

月刊誌「小児科臨床」のご案内

《本誌の特色》

- 1948 年創刊以来、小児科学の研究発表の場として活用されています。
- 小児科専門医試験（または小児科指導医認定）で小児科学会が指定する医学誌として認められています。
- 特集号・増刊号は、最新の情報から日常臨床に不可欠な知識まで網羅しています。

編集顧問

加藤精彦・早川浩

編集委員

別所文雄・水口雅・岩田敏・松山健・
今井孝成・浦島崇・小林正久・鈴木光幸・
田中恭子・長谷川大輔・張田豊・堀越裕歩

発行

月刊(毎月 20 日発行・土日祝は繰り下げ)

定価

普通号(年 10 回)	本体	2,600 円 + 税
特集号(年 2 回)	本体	4,700 円 + 税
増刊号(年 1 回)	本体	6,200 円 + 税
年間購読料(前納)	本体	41,600 円 + 税

(第 69 巻 2016 年)

12 号 特集

子どもの事故・虐待

(第 70 巻 2017 年)

6 号 特集

ここがポイント

小児診療ガイドラインの使い方

12 号 特集

最新アレルギー予防・治療戦略
— これからのアレルギーを考える —

増刊

グローバル化・温暖化と感染症対策

